

KK通信

昭和28年8月1日発行 (毎月1日1回発行)
昭和28年4月17日 第三種郵便物認可
発行所 堺局区菅原通4ノ30 曙書房
定価 一部 20円

第二一〇号

営業部 便り

◎七月号の本誌が例月より一週間ばかり早く発売になりましたが、KK通信の第十号が本誌より少し早い位で予定した中間発送になりましたが、今後は漸次本誌の発売日とKK通信の発送日との間隔を開けてゆきたいと思っております。

◎予約金切れの節は封筒の上に前金切の印を押しておきますから、引続いてお支払込み下さい。その節も事務の迅速をはかる為、御送金の節、何月号より或は第何号よりと明記下さるようになります。

◎直接講読者に対するサービスとしての景品写真は、本誌及びKK通信とは同送出来ませんので漸次別途に御送付申し上げます。内容について御指定下さる方がございますが、これは極めて煩瑣となりますので御勘弁のほどお願い致します。

代理部 だより

◎縛られた女の写真集は益々好評で同

好者の間では垂涎の的となつて居ります。現在分譲中の詳細説明は本誌七月号及びKK通信第八号に発表してありますから、お買い洩れの方々は打切りにならない中に至急御申込み下さい。

◎従来、分譲いたしました分に更に新工夫と新趣向をこらしました斬新な企画によりました作品は何れ改めて発表いたします故、御期待下さい。

【編集部 便り】

第一、第二の台風が襲来、梅雨には早い梅雨が、七月号を発売して以来毎日ジトジトと続くうちに、同好者のオアシスとしての本誌並にKK通信の堅陣を守る箕田編集長益々健在、号を追っての充実も一に氏の手腕にかゝっている。

ネオ・サディストとして有名な辻村隆も東奔西走、疲れを知らぬ縦横無盡の活躍ぶりに、紅顔可憐の美青年、塚本カメランは頻を出しそう。川端嬢はモデルより一転して最近ライターたらしめと志して猛勉強中、やがて凄いのがとび出すことでしょう。温厚篤実こつくと文庫の蒐集につとめる染田

玄先生、同好者からは「先生、先生」と引っぱりダコ、私設相談所を設けたとやら、人の世話をやくことでは編集部随一、中康弘先生の切腹研究も近頃は愈々油がのりきつて、女ハラキリ八景は今秋の特集となるものもつばらの噂、挿絵画家としては、三条春彦、栗原伸の二氏を迎えた。何れも老巧円熟、練達之士、今回、責め繪専門の研究家、南川和子さんを待た。引続いて今後の活躍を期待したい。その告白談は追って本誌にでも掲載することになる。尚高月大三氏は都合によつて編集部を退いたので以後、一切本誌と何ら関係はないので御承知お願ひたい。辻村隆の努力の結果、編集部と連絡のとれたモデル嬢多数を得、引続いてあらゆる変つた姿態を皆様の前に開陳せんと奮闘中——(S生)

KK通信

第11号

昭和二十八年八月一日発行 (毎月一回一日発行)
発行人 吉田 稔 編集人 箕田 京二
発行所 大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇 曙書房
定価 二十円 (振替口座大阪三四九五六番)

新時代の風俗雑誌

月刊 奇譚クラブ 定価百円 送料八円

八月号発売中 第七巻第八号

断然、他の追随を許さぬ八月号の威容。他の類例のない異色ある編集、古今東西に亘つた豊富な内容、前衛的風格を持つた日本唯一の風俗雑誌奇譚クラブは真摯な編集陣の努力と熱狂的な愛読者の支持とによつて此処に齢七年を迎え、今や確固不動の揺がざる基盤を作り上げました。

月を重ねるに従つて直接予約購読会員は激増の一途を辿り、読者による読者のための雑誌という本来の目的に向つて勇敢に進歩することが出来るようになりました。今後は号を追うて益々充実発展して皆様の御期待に副いたいと思ひます。

KK論壇

サディストとマゾヒスト

花尻 公友

本誌の読者通信よりうかがいますとサディストとマゾヒストの二者は相当明瞭に区別されて、しかも互いに相手側を攻撃して本誌の傾向を自分の陣営内へ引き入れようとしている気配が見受けられます。然しそういった読者通信のあり方については誰かも述べて居られたようにいろいろの意見もあるでしょうが、私はそういった事とは離れて、サディストとマゾヒストについて考えてみたいと思うのです。先ず本誌の寄稿家の中で両者の代表的な人を挙げれば(勿論これはその作品から見ただけであつて、決して寄稿家御自身をさすものではありませんので御承知下さい) 吾妻新氏と沼正三氏に指を屈するのにもたないでいいでしょう。

吾妻新氏は三月号に「サディズムの精髓」を発表せられて、その明快なる御意見は新しい型のサディズムについて新境地を開拓せられて、多くの読者の共鳴を得て居られるところであり、現に連載中の「クリスティーヌの受難」

ろによりますと、両者のどちらかの傾向の強い人は、一方も又或る程度の強さで潜在しているのではないかと思ひます。少くともそういう型の人が多いのではないのでしょうか。

一般に男性はサディスト、女性はマゾヒストとされていきます。これは肉体的に言えば正しくとも、精神的にいえば必ずしも正鵠を得たものとはいえない点があります。何故なら、女性も腕

(私自身クセグりに於て穩健なマゾヒストであり、且つサディストであると自分で考へている。但しまだ経験はない)。右の私の意見は只単なる架空の理論でしょうか、それとも実際にいろいろのケースで現れた体験と一致するものでしょうか、私は自分の心の動きからしてありのまゝ述べてみました。経験豊富な読者諸賢の御批判を乞ふ次第です。



「罪の椅子」 【フロンドの虜】 (四)

飛田良二

「御客様です……」
女の声だった。

「誰れだ?……」

Mは、ちよつと名残りおしそくに、まだ続けられている、水槽の裸踊りを見つめながら、おこつた様に聞き返した。

「河さんです……」

飯炊きを兼ねた留守番のよんだ様な声が、電話を通して、Kの来た事をつけた。Mは待つていた気持ちをよそにちよつと舌打ちしたい思いだった。そして一瞬又、迷った。が、しかしやはり此の眺めは、今は、Kのやつに見せ

る時機ではないと決めた。

「よし、今行く……俺の部屋へ案内して置け、そして、すぐ降りて来るんだ!!あとを急いでかたづけろ。今日は、いたすとしては、いかなせ。親切にしてくれ……」

電話を切るとMは急いで水槽の処へ飛んで行った。そして、水栓をしめた水を引くポンプのスイッチを入れた。水はほとんどあふれるばかりにまで上り。しつかり押えられた、上部の蓋と水面にわずか残した空間も必死に揺れるあふりで、波に立つて、あわれな犠牲者に最後の恐怖を突きつけていた。

あえぐ四肢のみだれに、かなり水を飲んだ絶望の様子を見た時、この地下室の一すみで、音もなく扉があいて、醜女の留守番が入ってきた。

醜怪な肉の塊……肥満した肢体に無気味な風車の、この女でなくなつた四十女を、たゞ意味もなく炊事や留守番だけの為に雇っているMではなかつた……。彼女には重要な役目があるのだ。即ち、これもMの変態性を満足させる為の一種の道具を兼ねているのである。例えば、彼が責め遊びあきた時その犠牲者の若い美しい肢体に、この醜怪な豚女のムチを振り上げた姿を

組合せて愉しむ為であつた。……しかし今日は急いでいた。早くこの何人目かの「上海行」をKと取引きを済ませ、さつさと連れ帰つて、ほしいからだ、だから入れかわつて入つた、その扉の中の一坪程もあるエレベーターの様に上下する、秘密の通路から、もう一度、彼は、この留守番に念を押していた。「早くしろ……」……と

「どうした?遅かつたじゃないか……」
「ほう相変らず、悪事、露見せず運良くやつとるな」気になる事を云うぞ……、ききまでもあげられて、するく来なくちゃ、そうこの慈善事業がばれるものではないぞ……ハハ……」
「処で、まあ、ゆつくりして行け!!」
「そうして居られんのだ、船の都合ですぐ発つ、又、来る。今日の品物を渡してくれ……」

Mは内心、しめた!!と思つた。
「まあ、急くな、一ばいやれ、今度の品物は、ちよつと、上等だ、かわいい娘だ、今、行水させている、お化粧が出来たら、お前の車に運こんで置く



大沼生

最近見た映画の責場二態

一、女間者秘聞赤穂浪士

吉良邸に侍女として忍びこんだ赤穂の間者千世(嵯峨美智子)が悪用人に密書を発見され、ローソク責めの拷問にかけられる場面がある。恋の叶わぬ意趣晴しという怨みも手伝つて吉良と

その愛妾の面前で用人に手酷く責められるのだが、折角の責場も則輩女の助け舟が入つて直ぐ終つて了うのが惜しい。

素足の甲の上に垂れる蠟、涙の熱湯

二、縮図

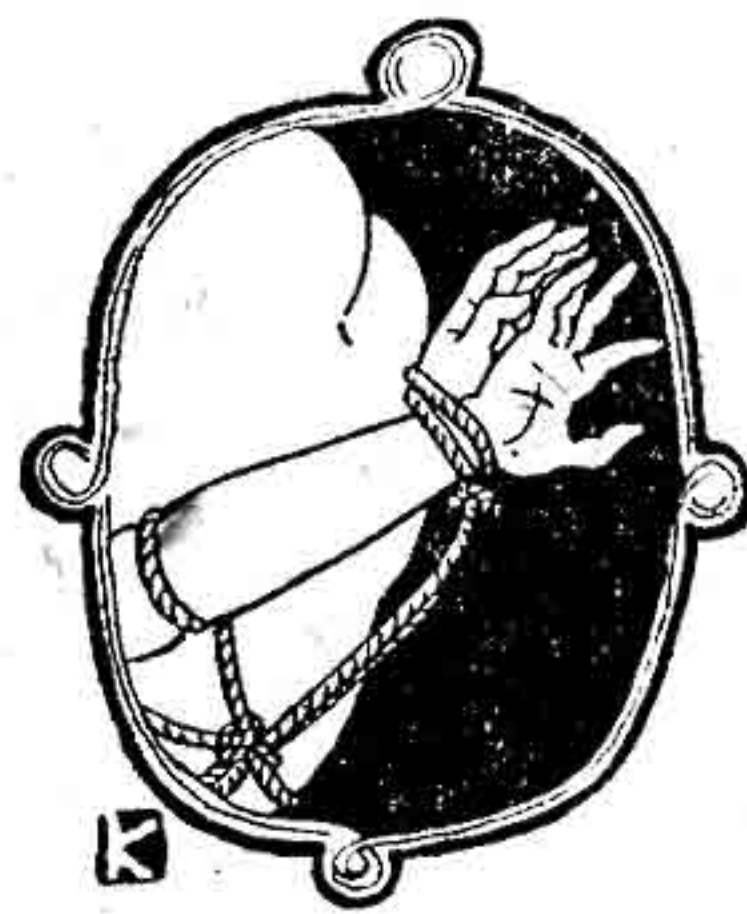
芸妓牡丹(乙羽信子)が抱え主に責められる場面が二回に渉り、かなり刻明に描写されている。一回は愛人の許へ逃げ出したのを連れ戻されて布団蒸絞るような千世の苦悶の呻き、血の溝を十字に描いて焼け爛れた素足のクロースアップは見る者に凄惨な迫力を感じさせる。ローソク責めは映画には極めて珍らしいものだけに一種異様な興味と関心を呼んだのである。

芸妓牡丹(乙羽信子)が抱え主に責められる場面が二回に渉り、かなり刻明に描写されている。一回は愛人の許へ逃げ出したのを連れ戻されて布団蒸

しの折檻を加えられるのだがぐるぐるに縛られた牡丹が女だてらに手負武者の如く足を蹴立ち、暴れ廻るのは始末が悪い。之では女体から発散する責の魅力もあつたものでない。布団蒸しの私刑については松竹映画「我が恋は燃えぬ」の女工の虐待場面にもかなり鮮明に出ていた。

二回目は虐待に堪えかねて実家へ逃げて再び舞い戻つた所を待ち設けた主人の苛責の犠牲にされるのだが、之は前よりは稍責場の実感が出て来たようだ。即ち後ろ髪を掴んで座敷中を引ずり廻し、最後には扱帯で後手に縛つて身体を引据え、鈴首をわし掴みにして物凄しい形相で愈々之から責め苛もうというクライマックス場面、例の如く助け舟(牡丹の父親)が現れて之も龍頭蛇尾の形で幕切れとなつて了う。併し襦袢一枚に剥がれ、扱帯で後手に束縛された身を髪を振り乱しながらも果敢ない抵抗を続ける受難の姿態は中々に魅力たっぷりなものがあつた。

補抄 伊呂波遺



(十七頁八行目) 乳房をまさ、撫でおろ(十九頁十四行目) 灼けるような感覚のなかで(二頁十九行目) さしこま(二頁五行目) 右手、スカート、さし(三頁三行目) 抱えこみ、からだじゆうを弄(同八行目) いびられる

(二〇七頁上段六行目) 両者の間で交渉が(同七行目) 肝心のものがエレクトロなのであります(同十二行目) エレクト(同十六行目) 全裸のまゝで(同十七行目) それに刺戟を(二〇八頁上段六行目) ブロース(同二五行目) 木のベツトへ仰向けに横たわります(同十六行目) 同様にしてベツトへ(同十七行目) 二人で揉み合っている(同十八行目) 男のウォーミングアップはほぼ完全な姿(同中段二行目) 眼前に於て、男女の愛慾繪巻が(同十五行目) 実行して。両者共にETXCI

Eして(同十八行目) 本格的な遂行(同下段四行目) 感情の嵐。身体に起つたの(二二頁上段八行目) アクシヨンが手(二三頁上段一七行目) もつと強く吸つ(二三四頁中段四行目) おさえつけられ(同二五行目) 羽化登仙の仙境をさまようのを(二六五頁上段一四行目) それを園江の或る場所にさし込み(同二七行目) それを挿んだまゝ(同二二行目) その品物をはさん(同二五行目) そんな変なものを(同中段二三行目) 変な所を

以上

ボクのプランでは、こゝでもう一遊びして食後多美子の旅館へ連込んで……本格的な助手付の責の本領を発揮する予定。

さて事務所へ戻るとボクがガレージに片付けている間に君子は素早く室内へ走り込み人気のない部屋にお茶の用意をととのえている、ボクを迎えに出て来てあとから出入口に錠をかける。

部屋の入口も同様、何かを意味するようであると思わせ振るような感じがするが本人は大した不自然さはない様だ。

ドツカとソファに腰を下ろしたボク……一服の茶の後、剝玉子にかゝる何の抵抗もない、ズロースも靴下もない君子はわけなく素裸にされ壁面の帽子架に両手を高くと爪立つて吊り上げ、ボクはそこ迄ソファ椅子をすべらして行つてドツカと腰をかけたまゝ眺めつゝ

「イタイかいッ」

「イエエまだ……」

「日曜のドライブはごめんだ、気疲れしたよ」

「すみません」

短信往来

「あやまる事はないよ、ドライブと今日の事とどちらがよかつた？」
「社長さん、イヤッ今からのもの、でしようフフツ……」
両足の爪先を少し踏み動かすと腰を

小さくねじつてくすぐり笑いでエクボをホンノリと赤めて又々殺し文句一発最初の内口丈の達者な奴、今に見ているこつち言う吊縛したわけを知らしてやるからと心の内にホクソ笑みつゝ。

「何なりと、我を張つとれ、ボクはゆつくり見せてもらうから……」
と大きくもたれかかつて口にくわえたラツキーストライクに火をつける……
(未完)

○買めの老大家、伊藤晴雨先生は今般「責めの劇団」を結成の上、六月一日より東京都内を振出しに初日興行を挙げられる。背景製作と舞台装置、繪看板、脚本演出等一切氏独自の方法を以て開演される由、本誌に於ても地方の読者のためにその紹介をしたく考えています。

○吾妻新氏訳の「クリスチヌ」の全訳単行本の照会を受けますが、これは小誌に於いて扱う際は会員にのみ本紙上に於いて御連絡致します。尚、ガリ版刷りの案内を東京の某所から貰いましたが貴社と関係があるものかどうか信用状態を知らして呉れという問合せに時折接しますが、本誌では他に傍系的なものは何一つ持つて居りませんか

○何卒ガリ版刷りのいかがわしい案内等御信用下さらないように願います。
○予約(金をとつたまゝで中々品物は送らないという通販屋があれば、当方も同一視されて一応疑われるので大変迷惑することがあります。月刊物を出していないもの等は予約金だけを集めていざ出版にかゝろうとしても生活費に費消してしまつて夜逃げしてしまふというようなのが昔からよくあつたものです。

○本誌では予約購読料は確実なる有価証券として保管し絶対に運転資金として流用して居りませんから、如何なる時にも御迷惑をかけることはありませんし、又品物が出来ていないのに、予約金だけ先徴収して出版するというような事も致して居りませんから何卒御信用下さい。

○限定版は忍ちのうちに締切りとなりましたので、若千部数増刷の上、お求めに依ることにしました。会員の方でまだお求めになられなかつた方々は此の際至急御申込み下さい。今後は再版はしない方針です。普通版は六月末日完成の予定です。

○縛られた女ばかりのアルバム「美しき縛しめ」は五月三十一日に完成、御申込みに従つて限定番号捺印の上、発送申し上げました。これは前号にて申し上げました通り、アルバムの大ききの変更によりいさゝか予定より遅延いたしました点は厚く御詫び致します。そのかわり、送料が予定の丁度倍かかりました。御期待にそむかぬ豪華版になりました故、きつと御気に召した事と思ひます。

あわてるな……」

Mはワイスキーをグラスに、そそぎながら云う。「片手にまけて置く。あとは、たつぷりたのしんでから、何処の空へなり処分してくれ……」

「おいおい、さんざん遊んで、そのかすを高く吹くよ……罰があたるぞ……」

「ハハハ……」

……後は悪魔の笑ひになった。

憲兵上りのKは、ひやけた。ひたいに大きなきずがあつた。「河龍」と云う名で通つていたMに劣らぬ悪魔の人間で神を恐れぬ男の一人であつた。

醜女が彼とKの前に現れた。そして、すっかり用意の出来た車をつけた。「よし!! 河の車に乗せろ、すぐ発つぞうだ」

「品も見ずに受取るか!! まあ信用しておこう……。今度来る時は、少しまとめて置いてくれ。ちよつて、たくらみがあるんだ、俺が直接、向うで始める……」

Kはグラスを置いた。Mも立ち上つた。「まとめて安くはならんぞ……」

「ハハハ……」

玄関には、Kの黒の小型車と、何時の間にか帰つて来たのか、彼の秘書が乗つて出た彼の乗用車が並んでいた。

黒い小型の中には、人の気配があつた。

Kが上海へ連れ去る物品……先刻の水槽の娘である「じやあ……」

Kは、ちよつと振返ると薄い笑ひを残して忽ち車の中に消えた。

地獄の悪夢から、突然開放された、とまどい……そして、未だ、希望と不安の境をさまよう娘……。と舌なめずりする思ひのKを、その狭い客席に同乗せると、黒い小型は急速に、Mの別荘を離れて行つた。

ふたたび彼の前に現われる事のないであろう……あの名も知らない娘の苦悩にゆがんだ顔、豊満なそして、良くととのつた四肢を思い返しているMのワキに突然、秘書の田処ユキが現われた。……

二十八才、黒い服、不思議な光を見せる、細く釣りぎみの目で、振り向いた彼をさぐる様に見上げていた。……

その白い、声のない笑ひを浮べた顔に、満面に得意の表情を讀んで、Mは新たな獲物、素敵な白い生人形の到着を知つたのである。

「先生、今日はごほうびをたんまり……」

秘書の田処ユキは両手を重ねて見せて、さらに「そして、うんといじめさせて……、ひさしぶり……」

Mを先生と稱んで、そう云つた。「ふん……鼻息が荒いが……、少々品物では驚かんぞ……何処で何を仕入れて来たて……此の悪女!!……」

「それが先生、驚いちゃだめ……」

Mの指導が行きとどいた、この白い鬼は、今では実に重宝な、欠く事の出来ない彼の片腕になつていた。この片腕が、次々と彼の変態欲を満たす為に彼の車を馳つて、新しい獲物をさらつて来るのだ。

今日も待望の「椅子」……罪の椅子……、に引きずる第一号に、ふさわしい白い生人形を、ラクく……、この白い鬼は、たくみに運んで来たのである。

る。

にわか雨の中、駐留軍ハウスの近くで、怪しげな英語で、同乗させ、そして、例の麻酔で、たおし、今、地下の別の暗室にとじ込めてある娘は、恐らく二十才を出ない「金髪の美人」だと云つのである。

倒錯の興奮にしびれ切つて居るMの神経をゴーツと、はげしくゆするものが走つた。新たな興味に、いきり立つ思ひのMは思はず「田処ユキ」のほほを半手打ちして見えた。打たれて初めて、「ユキ」は声を上げて笑つた「よし!!」

「椅子はどうした!!」
Mは声を上げた。……

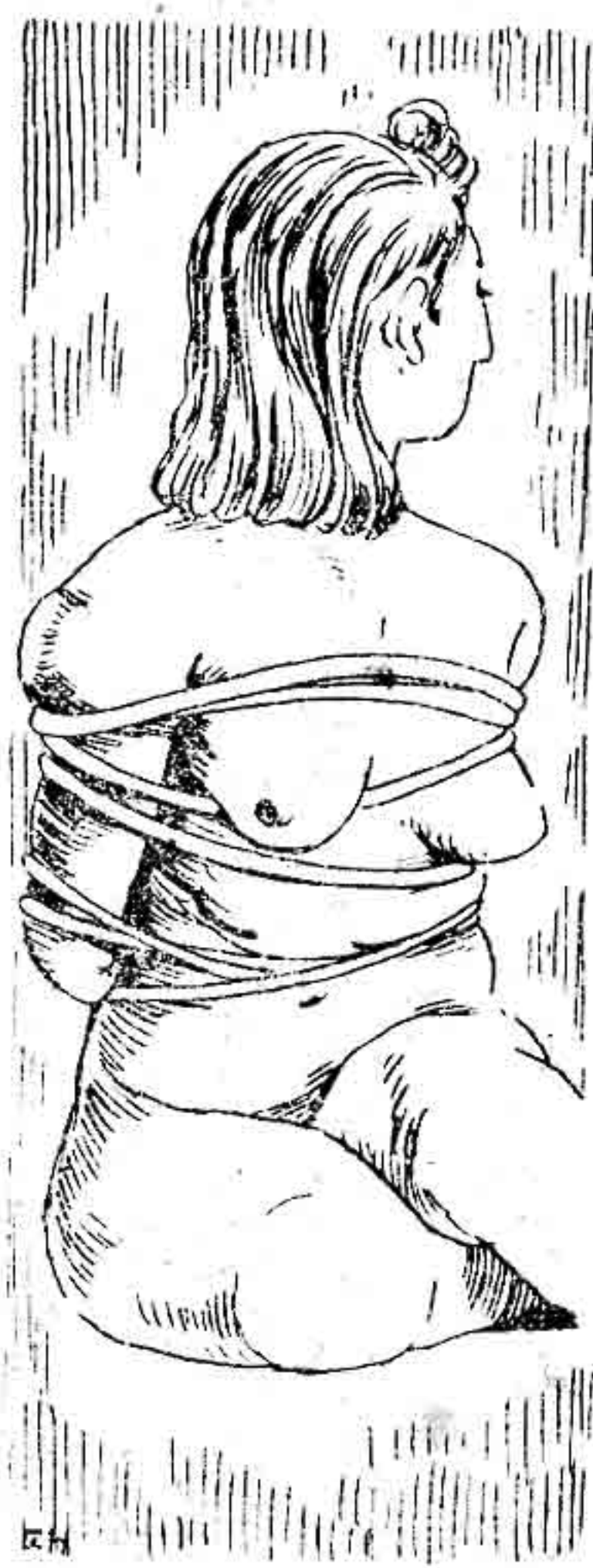
(未完)

急告

——会員諸氏へ——

最近、東京及び京都方面の未知の者より突然、種々の案内を送つてくるが、右は弊社とは何等関係ありませんから、御信用下さらないように願います。

マゾヒスト誕生



峰村佐吉

「十二月号に予告しながら、その余りにもリアルな表現のため、編集部は忌避に觸れ、発表を見合わせていたものです」。

これから本紙上をかりて発表します私の告白は私の半生の人生行路であり又世人から幸福の頂上にあると思われ私の生活の内面を挾つた精神生活の全貌でもあります。人間の運命という点から考えれば、私は確かに好運に恵れた半生を送つたといえましょう。壮年にして巨万の富を持ち、元華族

の出である絶世の美女を妻にして、しかも健康そのものの肉体、この世に何の不自由のない現在の私なのです。実際私は過去を顧つてみて、運命の女神が自分にはかり幸いしたとしか思えぬ程に、順風に帆を挙げる行路でした。勿論、私自身の努力もあるでしょう、然し努力のみでは達せられない好運が私に恵れていたのです。

先ず私の生れた家は市の郊外の県道に沿つたお城のような石垣をめぐらした豪壮なものでした。背後は山を背負つていて、そこには無数の石の地蔵さ

んに混つて累々たる石垣が埋れていました。後年、私が市の図書館で調べた郷土地誌によると、私の祖先である峯村武平という人は、戦国時代、三宅三人衆に味方して織田信長と戦つて破れこゝへ落ちのびて土着したそうで、夥しい石垣もその当時の名残りなのだそうでした。

小学校はずつと級長でした。四年生の時、鹿も四つ足、馬も四つ足、鹿の越えゆくこの坂道、馬の越せない道理はないと、という一の谷の合戦の唄を劇に仕組んで、私は馬上の義経となり、級友のガキ大将共を馬にして芸芸会に出た事を覚えています。父は市の有力者であり、担当の教師は私の家庭教師として家に出入りしていましたので、私は学校中でどんな無理でもききました。私が六年の時に父は保護者会長になりました。この時父は県議員にも当選しました。

然しそんな父の背景がなくとも、私は級友の誰よりも優秀だつたと自負しています。それは私が中学校へ上つて各地の小学校の首席を通した人達と争つても決してヒケをとらなかつた事からもわかつて頂けると思います。そんなわけでは私の小学校時代は慈悲深い両親の下で女中や下男にかしずかれ学校では「坊ちゃん、坊ちゃん」と下へも置かぬ待遇を受けて大きくなりました

中学校、高等学校、大学と普通のコースを辿りましたが、大学は父の希望によつて法科を選びました。卒業と同時に父の支配下の商會社に入りましたが、落ち着く間もなく、延期していた徴兵検査の結果、甲種合格となり。陸軍予備少尉として再び市井の人として元の会社勤めする事になりましたがこの時は一躍庶務課長として、会社の全貌を見知るためにこの椅子を与えられ、将来は総務部長、専務取締役というコースが予定されていました。

このあたりは私の述べようとすることに余り深い関係がありませんので省略しますが、私が大東亜戦争に応召して各地を転戦、終戦を迎えたのは、南の孤島で警備隊長をしている時でした。階級は大尉で中隊長でした。連合軍も小さな孤島に上陸するものうるさい

「知らないツノ、社長様ツ」

とライトグリーンの靴へ素足を入れ

つゝ上目でボクをにらみつける……。

ひもを結びながら

「わからないけど忘れられない事ネ。

キツト一生」

これも又完全な殺し文句を一杯喰わされたボクである、この君子があの最中でもスラ／＼とのこの殺し文句を文彌節で並び立てる日の近い事を考えるとはやはりこの遊びはやめられないのである。

新学期迄には——と思つていたボクの第一の希望はわけなく達せられて。

「さ、仕事はドライブだ」

「マァー」

と手を叩かんばかりに喜ぶ姿は子供か大人か？矢張り恐るべきはアプレ精神である、又知つてか知らずかノーズロのまゝ助手台に乗せて事務所を出たのが九時過、奈良へ着いたのが昼前、TH亭の離れの一望、車中は国道線の事としてユダンは出来ず、別にその方の異状はないまゝで更に昼食時も仲居の出入等で十分の楽しみもなく言うなれ

ば君子のサービス時間、午後は奥山へドライブ……「社長さん寒い……」

と心なく言う君子。「そうだろう……」

とニツと笑つてやると「イヤツもう言わない」

とスカートの裾を押える。

キキキツと若草の裏山のはげたくほみに車を横へすべり込みますと小さい作も樹間の下でストップ。ブレーキとアクセルから足を離すと君子の方へ向きをかえて……スケヒダの上に……横抱きそして割合に落付いた気分ですツスの雨、そしてすぐ両手を掴んで背に抱ひ上げての横抱きのまゝのナヴァロキツス……

「ムムムツ」と小さいからだをよらせて両足を突張る君子……そして朝の真赤の顔とは思ひもよらぬウス赤い頬だけである、矢張り気の落付かぬせいだろう。

それでも唇難した次には息もつかずスベ／＼した熱い唇を喘ぐようにしてボクのそり立てのひびにすりつけて来る君子。全く子供か大人か判断に迷う

責の演劇

責の演劇として最近新世界のO劇場で見たバレエスタジオ「立ちどほしのせむし男」このファーストシーンは割にいたゞけるものがあつた。ヒロイン（マリ）になる新城マリというストリップ、確かにマゾ的素質を持つているということが伺われた。というのは前回見た時にも彼女にその気味があつたので秘かに注目していた。

女であり平凡な内に何か心身共フレッシュである。バックリ口を開けた切ない表情はステに何日も前から悦楽を知つていた女と少しも変らぬものであり、反り身になつたまゝ突張つた全身そして後手に掴まれた両手の十指は責の受入態勢そのまゝの様子で確と指を立て、握り締めている。

ボクは又完全にノサレタと同様助手席の君子をうしろへ倒すとそのまゝサロンのクッションへー、自然自由になつた両手で顔を覆つた君子。責のボクにしては全く珍らしい事で

このファーストシーンは牢獄の場、五人の女囚の中、三人が両手を鎖で縛られて悶えている中、鬼看守が来て女囚達を鞭打ち、一名の女囚を裸体にし、大の字に縛りつけ、前を焼く処があり、その女囚になつたストリップ新城マリの苦悶と悲鳴、多分にリアリステックです。新城マリに良いM的アイディアを与えれば相当見応えのあるものが出来る筈である。

(S・H生)

ある、然し落付いた感情は少しもない寂漠たる十分間。

「どうだ温まつたかい」

手の自由な君子はステに女らしく忘れた時分に思い出したように「ハイ」と我にかえる、土産物を一通り買つてやつて力み返えつていた程の効果もなく却つてボクの部屋の方がなつかしく慕わしく一目散に車を飛ばして帰る事にした。車中八日の授業開始後も夕方四時よりは出社するように話をきめ事務所へ戻つたのは夕方と言つてもまだ明るい季節となつた五時。



ボクの責め方 (六)

宝塚二三夫

「嬉し悲し快しの涙一条」この感動を残して君子は最後の縄目を両足首に受けてボクの椅子にぐんなりくの字なりに転がってボクの責後の目を楽しませている。

こうして事後の素裸の手足に縄のかゝって転がった女、こゝ迄来て終うと百人が百人共大した変化のない事も多年経験の事実である。その中に事後逆も余裕シヤク、とまでゆかずとも不自由な手足をくねらしてボクの足元にすり寄って来て片頬をボクの足の甲に乗せてすりつけ「あんた……」と

ボクの方を流し目で嬌笑する秘書松本のような運、又「もう得心されましたの」と毒付くような君江又「すんだんでしたらどこかへ縛りつけて置いて頂戴」とあく迄マゾ化した今度のニューフェイスたか子等話題はまさに盡きせぬ泉の如しである。

斯くて無一物のまゝソファーにかけたボクの足元に掬め転がった君子に対しボクの素足になつてする足のゆびでのくすぐりいたすは君子の気付薬でもある。「アツ社長さん勘忍して、勘忍して頂戴……」漸く君子は顔色も少しのホテリ丈で全身のくねりを戻す……。「これからいつでもこんなにさす

か、どうだ……さすなら許してやる……」

「ハイ」エクボはいつもより小さく出て舌だけの返事でパーマの乱れを軽く頭を振って直しつゝ哀願の瞳、

「素裸だぜ……」

「……」

「ハイ言わんか？」

「ハイ」

「高手小手だぜ、両足も……」

「ハイ」

「そのまゝくすぐられるんだぜ」

「……」

「ハイ言わんかッ？」

「ハイ」

「それから……」

「……………」

「言わんかッ？」

「ハイ」

「何がハイだッ言わんこのまゝさらしものにして置くぞ、言え」

「ハイされます」

「されますか、して頂戴かどちらだ」

「……」

「言わんか」

「ハイ、して頂戴」

将に消え入りなん風情にボクの心情は又次の……然しこれ以上は後刻の行楽中の悦境として一先ず許してやる。然しズロースと靴下は渡さない……それでも漸く力なく起きて縄目のあとに気もかけず嬌聲とエクボの哀憐調はとて無言に出来ぬ娘の美しさ——立ち上つて黙々と身なりを調える君子、そしてズロースや靴下の事には一言も触れず目がさめた様にまばゆそうに顔付を改めてウス赤くした頬にエクボも深くよみ返らし

「お仕事は……」

「それよりもどうだつた」

いつもの赤面だけで

と思つたのでしよう。お蔭で私の中隊は無罪で復員帰還することが出来ました。昭和二十一年の夏のことです。

世間の復員者という一般の概念を越えて私の復員は恵れた復員でした。父は戦時中の活躍がわざわざいって追放にはなつていましたが、すこぶる健在で

支配下の会社はやはり父の実権下になりました。復員して路頭に迷う人も多いのに、私は直ちにいくつもの会社の社長についたのです。

時は終戦後の混乱時代、数年の激しい戦場生活によつて鍛え上げられた私が、父の残した財産を瞬く間に十数倍

便所の落書とアブ傾向

蓮沼生



私は便所の落書について特に研究したり蒐集したりしているものではないが、よく旅行するのでその折々の鉄道の駅の便所やターミナルの公衆便所等で拾つた便所の見聞録を思いついたまま書いてみる。これは勿論、私の狭い範囲でしか何気なしに見たものであるから、そのつもりで見て頂きたい。

確か新宿駅の構内の便所であつたと思うが、相対アルなタツチで縛られた女の落書を見た事がある、大体便所の落書というものは何処も似たり寄つ

たりのもので、そういった形式内容のものが若しノーマルなものとしたら、これなんか相当変つた嗜好の持主によつて書かれたものであらうと想像される。全裸の女が松の木かなんかに両股をひろげたまま逆さ吊りにされているポーズだつたと記憶しているが、まだ外にもあつたようである、昨年の秋、

門司へ行つた時、やはり駅の構内の便所で男色を嫌悪或は冷笑するような文句を見つけた事がある、よく注意してみると案外、ホモ関係の落書きもある

否数百倍にするのに、大した苦勞をすする必要がない程、四圍の状況は私に恵まれすぎていました。こうして私は揺ぎない確固たる基盤を作り上げてしまつたのです。話が少し前後しますが私が帰還した時、市中にあつた事務所や邸宅は全部戦災で焼失してしまつてい

もので、天王寺の茶臼山公園にある公衆便所等には、そういった求愛の文句又は呼び掛け、逢曳きの日時、場所等を書いたものが相当量見られた、これなんかは女色の場合は極めてありふれた事柄なのだが、高校生同志とか、職業は不明だが十九才の男、なんかとサインがある所を見ると、いささか奇異の感に打たれる。

私がそういう事に特に興味を持つこととなしに何気なしに見た範囲でも相当眼につくのだから、特に注意して蒐集して歩けば案外な数に達するかも知れない、板壁に穴を穿つたり、扉を壊したりする窃視的な行為は場末の公衆便所なんかでよく見受けるものだが、これはアブ的傾向というよりもあまりにもブリミティブな思春期的衝動である

ましたが、郊外の本宅は森に囲まれてその宏大な宅地も空から覗うことが出来なかつたのでしよう、何らの被害も受けて居りませんでした。

母屋と泉水を挟んで離室がありましたが、こゝは従来不時の来客や父の文人墨客との会合に使用されていて、平常は使つていなかったのですが、この離室で私は一人の麗人を発見したのです。本当に麗人と呼ぶにふさわしい清楚で淑やかな令嬢でした。彼女こそ戦時中、南方で飛行機事故のため戦死した某華族の遺児なのでした。丁度母と一緒に私の家へ疎開してきて、その市中の邸宅が戦災にあい、終戦後も斜陽家族の一人として、ずっと居ついていたのです。

峯村家の嫡男である私、居候の斜陽華族の麗人、この二人が結ばれなかつたら不思議な位です。そして後に私の正式の妻になつた彼女、津矢子こそこれから、私の話さねばならない話の主題なのです。幸福の絶頂にあつた筈の私が妻である津矢子の為に、不幸のドン底へつき落されたのです(未完)

会友通信



六月に入り雨、雨、雨の連続です。

本日、美しき縛しめお送り下さつて有難うございました、六十一号でした。

受け取つてみて余り大きいので驚き且つ御社の良心的なやり方に心の中で深く感謝いたしました、此のアルバムに対して私の意見としては皆縄を用いてあります、時には絹の扱帯などで縛つたのもよいんじゃないかと思ひました。猿ぐつとも扱帯なんかをぐるぐると巻いたのもよいでしょう、先日お送り下さつたKK通信に「罪の椅子」がありませんでしたのは少々残念でした、奇譚クラブも七月号はとも立派になりました。何う違ふかと思つて比較してみたら紙がとて白いい紙になつていました、私は貴誌が判時代からのファンです、「愛の字問答」にあつた様に想像的サジストなのです身辺に同好者がございませんで、貴誌が唯一の友となつています、どなたか

交通を御願ひします。

(久留米、NO・1972)

吾妻新先生の「風流責各態」の中で、「足首も手首も上を向いている」のところで股間を通してよいのです、その場合はそこには全然体重を加えません、とありますが、それなら何のために股間をつるのですか、

二、「細引は手足のほかにうんといふ」で、大きな輪をつくり首にかけ背面はズボンのバンドを通して股をくぐらせ前にまわしバンドの下をくぐらせて輪に結びつけます、従つて前も後もY字形になり股間の部分は二本になりまゝとありますが、輪を首にかけ最初にうしろから紐を股間に通して前で首の輪に結ぶのですか？それともその逆に前からまわして縛るのですか、尚その場合どのようにすれば股間の部分が二本になり、前も後もY字形になるので

すか？それとも輪を首にかけ前からバンドをくぐらせ股間を通し、後のバンドをくぐらせて折返し又前にまわして首の輪に結びつけるのですか、よくわかりませんが、

三、「結び目が急所に当る縛りよう」で股の結び目を中心として尻にかけてはうんと強く締めて弛まぬように腰のバンドにしぼりつけ、前の方は只バンドをくぐらせるだけで緩急自在にする云々とありますが、初めのうちは前の方だけゆるみ、後が締つていてもだんくすれて股間全体が弛んでしまふように思ひますが、いかがですか？

四、「サディズムの精髓」には、股を縦に縛る場合は必ずズボンをはかせます、とありますが、この場合半ズボンでは如何ですか、又スロース或はパンツでは駄目でしょうか、それからズボンの生地は厚い薄いも関係ありますか。五、「後五十と前を十五で選ばせる」では何と何を比較するのですか、又何故絶対比較できないのですか。以上の質問、全部でも一部でも結構ですから「読者の多数のための代表的質問」と

認めて答えて頂けないでしょうか。
(千葉、吾島生)

沼正三様。
こんな通信を差上げる無様をお詫びします。

何はさておき、奇巧の執筆陣の中にあなたのような素晴らしい作家を迎えたことは大きなプラスです。「マゾヒスト講座」はその意味で壓巻、冒頭に掲げられたようなマゾヒストの詩なり日本で今まで紹介されてない外国の作品などドシドシ引例して下さい。

五月号の「マゾヒストの会」は僕の生涯に始めて会つた一大ロマン読物でした、男をマゾヒストにするまでの経緯が不自然で随分勝手な捏造ですが、一旦男を征服してからソフィアのサド振りは堂に入つています、特にソフィアの空想から出発した理想は、彼女を跪拜させ、彼女の身体の中の部分も御神体であり、排泄物に至るまで神聖とする——その驕慢な彼女の理想、骨の髄まで男を屈服せしめて快楽の絶頂にしている思想はそのまゝ、男性マゾの

たします。住田弘志氏のアヌスへの讃歌、これは羽村京子さんの異常なほどの肛門に対しての執著、それに関連して筆者の共鳴を熱狂的な気魂で述べたものであつて、京子さんが女性であるのに比し住田氏が男性の立場からしてのアヌス讃歌であるだけに興味深い対照を示しているといえる。

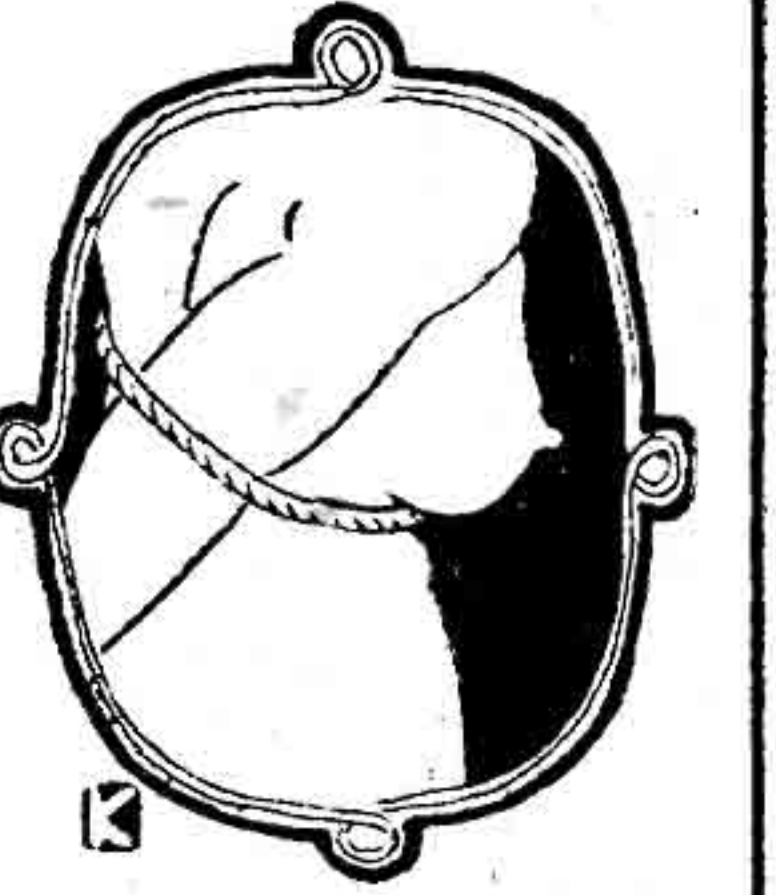
現代小説として、本誌の古い寄稿家である児島光氏が力作「色狼」を物さされた。因果物の見せ物小屋に生を享けた可憐な美少女が醜怪な不具者たちに混つてすく／＼と生長してゆく、そして性に目ざめた彼女の前途にあらわれた人生はなんであつたか、サディストにもマゾヒストにも喜ばれる読切小説時代小説としては窪村弘氏の片耳伝奇が第二回目として益々油がのつてきている。主人公のお嬢が恋人大村右近の見てゐる前で曹根権三のために酷い責めにあう。しかし、これは単なる責のみの小説ではない。謎の片耳をめくつて善玉と悪玉とが手に汗をにぎる葛藤を描いて——といさゝか大衆小説の宣伝文句めくのでやめておきますが、と

にかく読みごたえのある小説であるといふことだけ、一寸ふつかけておきます。挿繪は出た三三春彦氏が、よくよく調子を出して小説のビッチに合して下さいました。女ハナキリの信者にとつてのがすことの出来ない貴重な文獻、「女腹切の考察と女性の切腹例」特に田谷敬生氏の御好意によつて本誌にはじめて掲載することが出来ました。勿論一般の愛読者にとつても十七才の少女の自刃の精細な描写は真に迫るものがあるでしょう。

岡田圭介氏の「妻は縛らず」は第二回の本号で完結しますが、サディストではあるがエロハンターではない氏の面目躍如として、結末のあたりは思わすほろりとさせられるロマンチックなもの、共感を持たれる方々が多いと思ひます。氏あたりが長いものを書かれたらなあ、と思ひます。新年号にマゾヒストの果を書かれた福田英一氏が筆を新にして「苦悶する裸像」を寄せられました。流暢高尚な文章に依つて幻想的な雰囲気を感じていくまで描き出された氏の筆力には、思わず頭が下ります

現代インテリの苦悶といつたものがこれほど精彩に描かれたものがあつたでしょうか、「らぶ・すれいぶ」は春美をめぐる二人の男たちが、事もあろうに春美の夫である清二の目の前で恋の翳当の結果、死闘を演ずる。それを眺めるサディストの妻とマゾヒストの夫、毎号倦かせない用意周到な筆の運びに思ひまる興奮の中に本号も又次に對する大きな期待を讀者に抱かせたまゝ未完となつてしまいました。らぶ・すれいぶと肩を並べて新年号より連載を初めた「深火」は作者松井籐子女史の人生に対する懊悩をそのまゝにこの回では大きな断層にぶつつかつた恰好、小百合夫人の熟慮した縛しめ、それがはからずも夫の相手の男の邦彦であろうとは——。舞台は熱海より再び新世界のふみくとした裏町へ移つてゆきました。果して小百合夫人はと

の裏町でどんな目にあつたのでしょうか四月号の錯倒の告白で「開花の契機」を発表されて、俄然、讀者間にセンセーションを巻き起した信太馨子さんは「悦虐秘帖」と題されて手記を寄せられました。女性マゾヒストとしての筆者が赤裸々にその所感を述べられた大胆きわまりない告白には、男性としても大いに考えさせられることのある文章です。奇譚クラブは女性の寄稿家を優遇するという声がありますので、前宣伝はこれくらいにしておきますが信太馨子とは変つた年代経歴の若林啓子さんの「被虐の愛情」は、信太さんをアプレとすれば（これは馨子さんが四月号で述べておられましたので失礼乍ら用いました）、啓子さんは典型的なアバンタイプであろう。サディストとしての男性はどちらの女性を好むであろうか。(S生・T生)

八月号の
内容紹介

毎号発売される度に愛読者からの嬉しい絶賛の言葉を頂いて居りますし、又K通紙上では迷評家氏の御高評を賜つて居りますが、今度は会員の方々にだけ、発売前の八月号の威容をほんのちよつぱり内緒で御披露することにしませう。

読者の絶大なる期待に失望を与えないようにしようという編集部異常なる努力が実を結んで、八月号は又々皆様の机上に燦然と光彩を放つことでしょう。先ずクリスチーナの受難が本号をもつと第三回を迎え完結いたします第一回より第二回、第二回より第三回へと盛り上つてきた高貴な汚れないクリスチーナへの凌辱は本号にて最高頂に達した感がある。これは女性であるクリスチーナから見た被虐態勢であるが、本号より連載第一回を初める甘

美なるアリスの降伏は、逆に責める側の男性であるジャックの手記となつてゐる。共にサデイスチツクな愛読者には唯一の宝典となることを疑われない。

藤安節子さんが自己の体験よりして物された「女人群像」は場末の製本工場に勤める女工たちを拉しきつて生々としたリアルな世相断面の揆括に成功している。ノン・フィクションの小説ともいふべき女人哀歌である。あるマゾヒストの手帖から、は本号では堂々六十数枚を一気に掲載、以つて同好者の期待に応えた。沼正三氏が前号の補遺と訂正で少し言及された「公妃の復讐」は氏の訳で誌上を飾っている。サデイズム側の総帥たる吾妻新氏は前記の「クリスチーナの受難」の外「女のズボンについて」と題して前号の沼正三氏の文章の中、スラックスに對しての異論を述べておられますこれは特に筆者の御希望によりまして前号に予告しました「鞭打たれる外国の少女達」の一文と組版直前に入れ替えをしたものであります。従つて「鞭打たれる外国の少女達」は九月号に予定される外国の少女達」は九月号に予定い

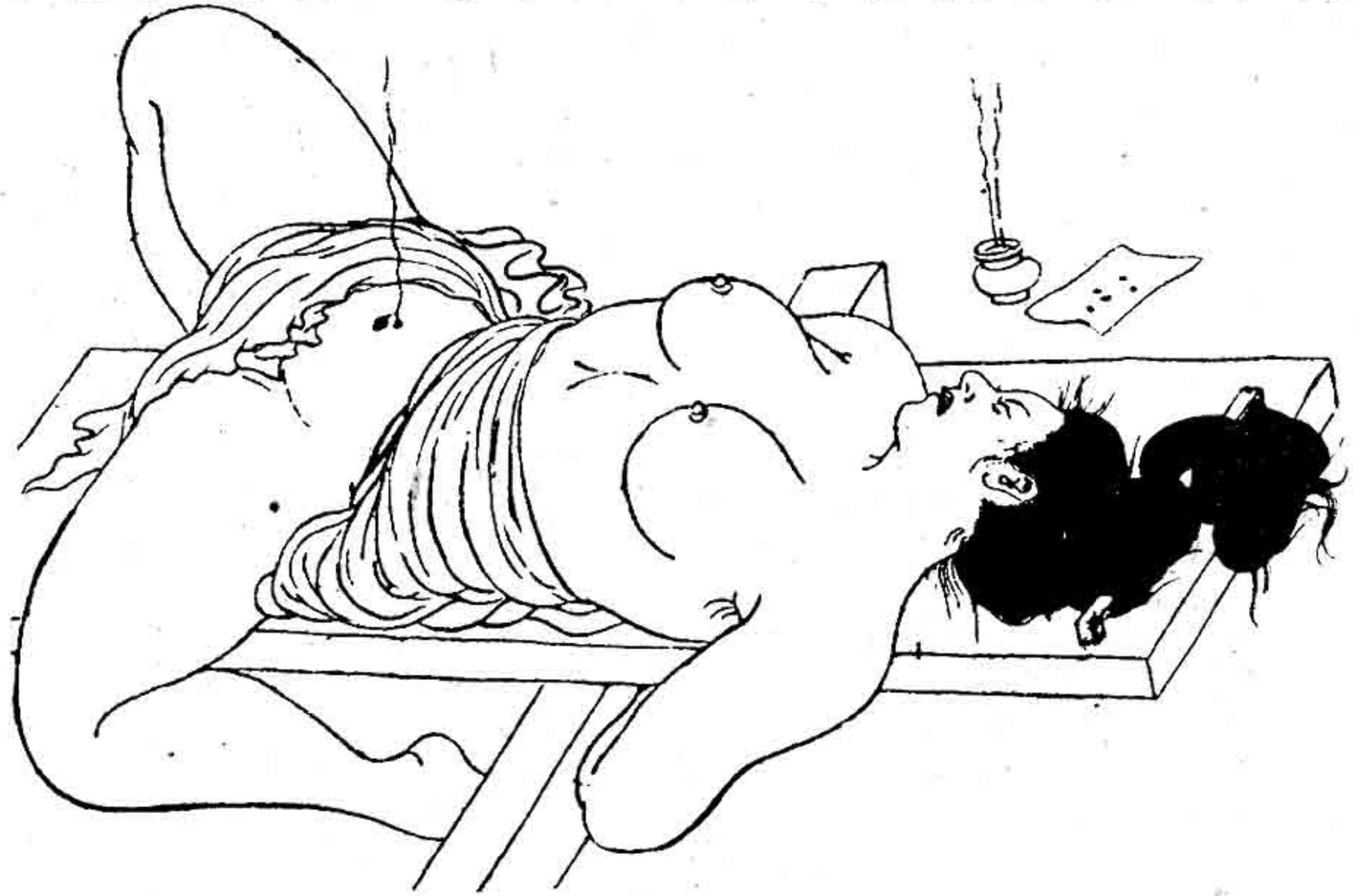
灸責めの画

南川和子

初めてお便りを差し上げます。私は大分以前よりの御誌の愛読者でございます。いつも貴誌を拝見して、私は私なりのアイデアで拙い画ではございますが描いて居つたのでございます。

とてもお見せするような作品ではないと躊躇いたして居りまして、そのため大分前から描いておりながら、自分独りで楽しんでおつたようなわけでございました。文章の方ではいろいろと投稿遊ばず愛読者の方々が多いようでございますが繪の方は余りお見受けしないようでございます。

今回意を決しまして、こゝに灸責め三態として三葉の責面をお送りいたします勿論、未熟なものではございますが、若しこんなもの



でも発表して頂けるのでしたら、よろしく適当に御使用下さいませ。縛られている女に對して異常な興味を持つて

理想でもあるのです。——但し僕には神酒の体験は今のところありません。専ら脚崇拝です。——これほど激しい刺激を与えた読物は僕の生涯にかつてありませんでした。

五月号が、僕にとつては「感激した特集号」と銘打つのに反し、一部男性サドにはあきたりないとの評があるという。編集陣も頭が痛いことでしょう。しかし、これは女性緊縛愛好者達の一人よがりな言評ともいふべきで、雑誌を独占するが如き考え方は厳に排すべきでしょう。女性マゾがいれば反對に男性マゾがいたところで何の不思議もありましよう、しかもマゾは純粋な女性美の追求に終始するのです。その点非情なまでにカンヤクがないのです、女神の美と尊厳さを持ち合せぬ婦人はわれわれには輕蔑しかありません。今日Aの女を愛しても明日は弊履の如く捨て去りBの女性に走るのです。貴婦人の名にあこがれる女性の何と多くしかも真に貴婦人の肉体と傲慢をもつ女性の何と少いことよ、又カミソクさい婦人に自ら好んでなりたがる婦人

のかくも氾濫しては僕達は味気なさを感じるだけです。

奇クの執筆陣に吾妻新、沼正三の両氏を迎えたことは正に双璧とも稱すべきでしょう。「人間便所の妄想」を書いた二宮忠一氏、それに鬼山絢策氏、近東規矩也氏は立派な作家です、女流作家には編集部が優待する割に立派な作品もないと思いますが、古川裕子氏や森山美歌氏は大きな勇気をもつて体験記を発表するあたり本物です、尊敬に値します。ニセ物は駄目です。終りにお願い、「女主人と奴隸」という鞭打義書をやどこかで入手して翻訳して下さいませんか。それからあなたの体験記でも結構です。御健筆を祈ります。

(福岡NO・1604)

七月号「或る通信から」の室崎美佐子さん。貴女の素直さに敬意を表します。いわれのない虚飾や見栄、或は羞恥心のため「緊縛美」の世界に志を有しながらそれを果し得ない人の多い中に(私もその一人ですが)「縛つて頂

きたいのです」と率直に表明された貴女の態度は実にスツキリしています。貴女の率直さは、踏ん切りのつかない他の人々にこよなき力づけとなるでしょう。「縛つて頂きたい」と名乗りを上げる女性読者が、代後も続々と出現することを私は期待しています。

奇譚クラブの読者となり

併せて特別会員たらしめる理由

例えば、ある、あまとりあの高橋鉄氏の精神分析を性愛心理に於ける生理学とするならば「極端に理性を没した変態性欲」の研究はこれを性愛心理に於ける病理学といえると思う。しかし普通医学に於ける病理学は多く静的研究であつて、生きて活動してそして病んでいるもの、いわば動的な研究はなされてはいない。学者の生体解剖への概念は今次大戦中に日独の学者に戦犯を製作した程熾烈である。この概念からして「病態生理学」又は「病態生理の研究」という概念は容易に抽出されると思う。いわば性愛心理に於ける病態生理又は正態病理の好対象好資

塚本先生。どうか彼女の希望を充分に果してあげてください。遅くとも九月号には、高小手乃至雁字がらめで思い切りはでに縛り上げられた室崎さんの裸身が拝見できるようお願いいたします。

(埼玉 岡村生)

料としての奇クの作品並に作家の推移を見ていることを許容されたい。川端多奈子氏の文章の逐次漸次的変化、玲子女史の筆致の変化(単に技巧の進歩のみでない、本格的オメガの附与)宝塚三三氏に於ける誇大性と自己閑隙性及びその他、奇クの読者になつてから相当の成果を得た。たゞ一般にアニストという新語で代表される人は、その性向の非社会性からして、容易にその本心を露呈されない、その斡旋として奇譚クラブ並に編集担当の諸兄に期する処極めて大なりというわけである。(失名氏より)



私 評

一九五三年上半期の
ベスト・テン

佐 渡 魔 造

一九五三年上半期の六カ月の作品、(KK通信を含めて)より感じたる私一流の意見を述べてみます。先ず大注目作、「クリスチーナの受難」、「罪の椅子」、「マゾヒストの手帖より」は目下連載中ですので下半期に譲るとします。拙い形容詞で例えてみるならば、三人の美女が、或は豊満な、或は引き締った、或は可憐な、それぞれ違った肉づきの線をやがてあらわに心ゆくまで凌辱されてのたうつ裸体を見せるべく縛り上げられて、私達の眼前に横たわっているような昂奮を覚えさせてくれるものです。やがて全裸にされたときに、ゆつくりその味の甲乙を味わせて頂くことにしましょう。それにしてもこの三大作を控えた下半期の充実ぶりが今から楽しみです。

私の選んだ新年号から六月号迄のベストテンとしては、

- 一、淫火(新年号から連載、未完)
 - 二、サジズムの精髓(三月号)
 - 三、松井籟子女史を圍んだ座談会(六月号)
 - 四、地獄繪(KK3よりKK7迄)
 - 五、交悦に伴う責の衝動心理(新年号)
 - 六、らぶ・すれいぶ(目下連載中)
 - 七、僕の記録(新年号と五月号)
 - 八、風流責各態(五月号)
 - 九、マゾヒストの会(五月号)
 - 十、廊の灯影(六月号)
- 十位には困りました。即ち二月号の「燐光」、三月号の「鉄格子の中」四月号の「続囚衣」五月号の「雌獣の手記」それに獄取一氏の一連の告白物、芳野眉美氏の詩情溢れる作品、等が一長一短の競り



合いを私の心の中に演じたのですから「淫火」は確かに野心と努力に満ちた大作、松井籟子女史のこの作品に対する野心と抱負に絶賛するのは誰にも異存なきところでしよう。四つ巴にも五つ巴にももつれた淫火の焰は私達の心に迄燃えさかります。特に四月号以降の素晴らしきは論外です。

次にこの期に吾妻氏と沼氏とを得られたのは奇ク最大の収穫ではないで

しょうか、私は両氏の博識に敬意を表すると共に、凌辱を第一とするサジズムの精髓とそれに好一对のマゾヒストの総師、マゾヒストの手帖、私は両氏の出現に多大の喜びを抱き、奇クが益々進ましく、且つ或る意味で健全に充実される上に於て最大のプラスであつたらうと無条件に認めます。

座談会は二つ共、言うは愚か、奇クの企画の絶対信頼出来るものである

ことを如実に示したもののいうべく、今後ともこういった企画をドシ／＼進めてほしいものだと思います。地獄繪は舞台の幕を切つて落されたときは目もくらむばかりの夢の国の精のような演技に眩惑されましたが、後半に於いてやゝ失望を味わわれるところがありました。



雑 報
通販戦線異常あり

▲KK通信の第九号あたりから大変充実してきたから嬉しいという読者の便りが沢山寄せられるので、担当者一同大いに意を強くして更に内容の充実に努力したいと思つてゐる。KK通信は最初第一号を発行した時から、本誌である奇譚クラブにおおさつた恰好で出発したので、どうせ赤字なら無料でゆこうというのが直接読者に対する贈呈となつて現れたわけで、最初からそれだけで採算を樹てようとしても郵税も出ないことになり、二号雑誌の憂目を見る

然し、何はともあれ、奇クが昨年より一段と躍進したことは決定的なもので、喜びに堪えないところです。昨年に見られた一部の余計なものは淘汰せられたスムーズな編集ぶりは非常になめらかなつた誌面を見て、編集担当の皆様御苦勞を感謝してこの章を終ります。(了)

位がおちである。読者から半年分や一年分の購読料を払込まして、三号でチヨンというのは、通信販売の不信に迫車を加えることになる。書店で買うのであれば休刊や廃刊になれば買わなきゃいゝだけの話であるが、予約となれそうはゆかない。

▲嘗てこういう話をきいた。会員募集で一人から五百円宛徴集して、五百人として二十五万円の金で、パンフレットの出版をやるという企画を立て、さて、蓋を開けてみると七十数名の会

員が会費を払込んできた。然しこれだけではとても印刷出来ないの、更に広告をしようと思つている中に、預つた金は生活費や広告代に費消してしまつて、最初は欺すつもりでなかつたのが結局欺したような結果となつて夜逃げ同様の退散をしたというのである。

▲本年の初めあたりから、公刊雑誌に対する当局の風当たりがきつて、俄然通信に頼る業者が増えてきたが、予約金とか会費とかいう名目で先金を取つてドロンをきめるインチキ社が多くなつてきた。現に本誌の或る編集員が金を送つて申込んだところ梨の礫、再三督促した結果、一枚の葉書が迷い込んだだけでチヨンとは、これでは暖簾に腕押しで喧嘩にもなりません。

▲店頭で堂々と販売する公刊雑誌類に對して強い制限を加えたため、次第に潜行的となり会員制や限定版の恰好で出す出版物が増え、俄然今春より、それら非店頭販売出版物に対してワイセツ罪の斧をふりかざし初めた。「相対会報告」が本年初頭問題になり、又、「徳川性典大鑑」が良心的な好著であ

りながら、やはりワイセツ文書としての容疑で検挙されたという。

▲右の様な有名なもの以外、通販による出版物の検挙されたものは、本年になつても枚挙に遑がない。店頭出版物から、通販出版物へと当局の眼も光りはじめたというべきか。

▲それにしても発禁につき送本不能、損害のため返金も御勘弁となれば、読者こそ、いゝ面の皮である。

▲読者からの便り――

本日、突然、××市××社から貴社とまぎらわしい名で広告したパンフレットがきたので、貴書房と何か関係のある社かと思いましたが、それなれば奇譚クラブかKK通信に広告する筈だと、一寸おかしいと思ひました。最近インチキな所が多くて、不安ですので奇クかKK紙上に御返事してほしいと思います。―原文―(二六八三)

▲このような読者からの問合せが、ちよい／＼ある。本誌では他に關係を持つた通販店も持つていないし、又分譲品はすべて、本誌或はKK紙上に発表その社とは何等關係ありません故、何卒御承知おきを乞う。